

マザー・グースと英詩による音声教育  
 ---理論と短大に於ける試み---

Voice Education through Mother Goose Nursery Rhymes and other English Poems  
 ----Rationale and Experiment at a Women's Junior College----

名古屋聖霊短期大学      ホーランド 萬里子

## I 目的

最近英語教育に於てコミュニケーションを旨としたオーラルの面の重要性が叫ばれるようになってきている。それは日常英会話の習得だけでは不十分であろう。正確でわかりやすい発音、聴き手を意識した発話、それに加えて感情表現のできる表現全般の音声教育が必要だと思われる。日本語は基本的に視覚の言語であり、日本では教育全般に於て音声はそれほど重要視されていない。聴覚の言語としての英語を習う場合に音声の重要性と表現力はいくら強調してもし過ぎることはないだろう。スピーチやディスカッションまでいなくても音声を発するという点での音声の教育が必要だと思われる。英語教師として英語教育の中で何ができるかという模索から、音声を中心にした実験的講義を提示したい。これは英語そのものの学習と同時に、生きていく上で人間にとって基本的で重要な音声の学習の両者の融合を目指すものである。

## II 仮説

日本の学生は教室でとかく遠慮がちな声になりやすく、英語となれば自信のなさからさらに聴きにくい声となる。コミュニケーションの原点として、声を出すこと相手にわかりやすいしっかりした声を出すことが大切である。言語を習う前提として声を出すことがあるのではないか。

英語を習う場合に日本人にとって難しいのは articulation そのものだけでなく、むしろ日本語と決定的に異なっている英語のリズムであり、そうした流れの中での pronunciation だと思われる。listening comprehension でも reading でもまずこのリズムが基本であり、これを体得することが先決である。

rhythm というものを考えるなら、心地よく覚えやすいリズムの Mother Goose や韻律の整った詩は理想的と言えるだろう。しかも Mother Goose の簡単でリズムカルな繰り返しは、日本人に特に難しい音の発音の練習に格好の教材となるだろう。

長年にわたって伝えられてきた、また多くの人に愛されてきた作品であれば、それなりの内容があり、英語文化の背景となる知識も得ながら学ぶことができる。無味乾燥で単調な training に終わることなく、音声が生命である詩の音や心に残る内容を楽しみながら英語の発音を習得することができるのではないか。

さらに、よい listener や reader, speaker になる基礎として、声というものに関心を持ち、心の入った言葉によって感性を磨き、豊かな人間性をはぐくむ音声教育ができる

9月9日(木) 研究発表第8室(225)

のではないだろうか。

## III 方法

名古屋聖霊短期大学国際文化学科2年生を対象とし、通年の選択必修科目(セミナー形式)の一つを、「英語朗読法」(学生数は24名)として行なう。前期はMother Gooseと英詩により基本的な発声、リズム、イントネーション、発音等を中心に学び、後期はstoryの読み方としてfolk talesを中心に、expressive readingを学ぶ。ここで取り上げるのはその前期のものである。

毎回の講義に、その中心となるねらいを決めて、それぞれについてMother Gooseや英詩を選択して講義を構成する。そのねらいとしては、breathing, rhythm, English as a stress-timed language, articulation(日本人に特に難しいものを集中的に), resonance and duration, tempo and pause, pitch and tone, ease and flexibility,その他 expressive reading, choral reading, verse forms, 英詩と風土等である。詩の選択にあたっては、よく知られているもの、わかりやすいもの、文化的背景が提示しやすいものなどを配慮する。一人での朗読だけでなくchoral readingも入れ、音声を共にする楽しさ、創造する喜びを味わえるようにする。

講義は毎回、学生による好きな詩の発表・紹介と、教師によるその講義でのcritical pointsの提示・説明及びその練習用のMother Gooseや英詩の実際の読みと練習から成り立っている。具体的な詩及び各講義の構成の詳細については、アンケートの結果とともに発表時に提示したい。

## IV 結論

実際の教室での学生の反応を観察し、講義の最終日にアンケートを実施した。アンケートによれば、高校までのことでは、英詩を学校で全く習ったことのない学生が24名中19名あり、リズムについては半数の学生が習っていないと思っており、発音やイントネーションについては習ったが自信のない状態である。大部分の学生は内容を考えながらその内容を表現しようとして読んでいなかったとしている。

そうした学生の大多数は、このようにMother Gooseや英詩を通してリズム、イントネーション、発音を学ぶ言語活動は理解しやすく、意義があると感じ、好きである。短大での音声教育については、やさしくはないが楽しく、役に立ち、必要であると考えた学生が大部分である。表現豊かに読むことは非常にむずかしいが、行間を読んだり感情をこめて読むことや朗読の楽しさを知り、聞き手を意識するようになったという点も見逃せない。

音声を中心にすれば、いやでもそれから逃れられず、言語をその本来の姿で学べる。Mother Gooseと英詩は内容もさることながら、音声によって一番味わい楽しめるものであり、音声への導入として最適なものではないかと思われる。コミュニケーションのための英語教育として、表現の確かさと豊かさを目ざすこのような音声教育があってもよいのではないか――表面的な細事や雄弁がねらいでなく、相互理解と人間性涵養の言語教育として。

## I 音声表現を中心とする英語教育

1. 言語は音声の基本
2. オーラル・コミュニケーションの必要性
3. 符号としての言葉でなく、知的認識、感情的共感としての言葉

## II 学習内容

1. articulation, rhythm, intonation 等日本語と異なる音声体系の基本的学習
2. 表現力として pitch, tone, tempo and pause 等の効果的な使用
3. literary analysis と empathy

## III Mother Goose と英詩による指導例

1. Introduction to Oral Interpretation
2. Abdominal Breathing; Projection & Volume
3. Rhythm; English as a Stress-Timed Language
4. Articulation [l][r], [p]; Projection and Breath Control; Relaxation
5. [ə], [θ][ð]; <Students' Presentations about Mother Goose>
6. [t][d], [f][v], [j]; Phrasing and Pauses; Pitch
7. [s][ʃ], [z][ʒ], [w]; Tempo & Pause; <Poems and Natural Phenomena>
8. [ʃ][tʃ], [ʒ][dʒ]; Pitch and Tone; Empathy
9. [m][n][ŋ]; Resonance; <Choral Reading> <Wordsworth and the Lake District>
10. Consonant Clusters; Vocal Variety and Expressiveness; Literary Analysis
11. Ease & Flexibility (Tongue Twisters); <Verse Forms> <a Jazz Chant>
12. Reading Mother Goose and Other Poems on Stage
13. <Oral Test> <Submission of a Paper> <Questionnaire>

## IV 結果と今後の課題

## 音声指導上の問題点

1. 物理的条件
2. inhibition
3. 内容表現、感情表現と技術指導
4. 創造と模倣

## V Mother Goose と英詩による音声教育の意義と展望

1. 伝統的文化に触れることにより、風土その他文化的背景を理解できる。
2. 普遍的人間性を理解できる。
3. Mother Goose や英詩は音声が生きており、音声表現により味わいが深まる。
4. 外国語の音声体系の基本的学習を本物の中で練習できる。
5. 音声表現全般の集中的な学習が可能である。
6. 英詩、特に Mother Goose はリズムの調子がよく、記憶に残りやすい。
7. Mother Goose はリズムがあるため chorus reading がしやすい。

9月9日(木) 研究発表第8室(225)

8. 内容がコンパクトに凝縮され、reading aloud が簡便に楽しくできる。
9. 学生がscriptを作る choral reading は協調性、創造性を目指す人間教育になる
10. 知性や感性のかかわる、思考や感情を伴った言葉の教育が必要である。
11. 体全体で表現するといった表現力をつける教育が求められる。

#### REFERENCES

- Baker, Augusta and Ellin Greene. 1987. Storytelling Art and Technique 2nd ed. New York & London: R. R. Bowker Company.
- Capp, Glenn R., G. Richard Capp and Carol C. Capp. 1981. Basic Oral Communication 3rd ed. New Jersey: Prentice Hall, Inc.
- Clemons, Elaine. Speech pathologist under whom the writer had private lessons in 1979.
- Eliot, Kay. Former professor of The University of British Columbia who gave the writer private lessons and practice in reading aloud in August, 1983.
- Fujikawa, Gyo (Pictures by). 1982. Mother Goose. New York: Grosset & Dunlap Publishers.
- Keppie, Elizabeth E. 1973. Speech Improvement Through Choral Speaking. Massachusetts: Expression Company.
- Landis, Harry. British actor and director from whom the writer had individual lessons in voice production and oral interpretation in July and August, 1990.
- Lee, Charlotte I. and Timothy Gura. 1987. Oral Interpretation. 7th ed. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Louise, Abney. 1967. Choral Speaking Arrangements for Upper Grades. Massachusetts: Expression Company.
- \_\_\_\_\_. 1967. Choral Speaking Arrangements for The Junior High. Massachusetts: Expression Company.
- Louise, Abney and Grace Rowe. 1968. Choral Speaking Arrangements for the Lower Grades. Massachusetts: Expression Company.
- Moncur, John P. and Harrison W. Karr. 1972. Developing Your Speaking Voice. 2nd ed. New York: Harper & Row, Publishers.
- Oxford, Wayne H. 1979. The Fundamentals of Effective Oral Expression. Tokyo: Eichosha Co., Ltd.
- Roberge, Claude. 1985. English Pronunciation Textbook by VT Method. Tokyo: Kenkyusha.
- 近江誠 1984. 『オーラル・インタープリテーション入門——英語の深い読みと表現の指導——』 大修館書店。
- 貝瀬千章・古明地勝美 1982. 『英語アナウンス入門』 アルク。